5/27/04
報告：坂本 義和

谷口和弘「制度研究の近年的発展　―制度主義から比較制度分析へ―」
『三田商学研究』第 44 巻第 6 号（2002 年 2 月）
（２．２つの制度主義：(旧）制度主義と新制度主義（1）～（2））

（1）（旧）制度主義

① ヴェブレン的精神：能動的な人間モデルと制度の認知的定義　（p.33）

・（旧）制度主義の始祖 Thorstein Veblen は，分権的な市場の働きに全幅の信頼をよせて，合理的な人間行動とその帰結を研究してきた「新古典派経済学（neo economics）」にたいして徹底的な批判を浴びせた。

・Veblen は，理論家が「進化経済学（evolutionary economics）」を志向し，経済的な利益によって決定づけられた文化の成長プロセス, すなわち経済制度の累積的な連鎖を扱う理論を構築すべき，と主張。

② ゴーイング・コンサーンと「コモンズの三重対」　（p.34）

・John Commons は取引を基本的な分析単位として制度論を展開。

・Commons は，取引を①「交渉的取引（bargaining transaction）」，②「経営的取引（managerial transaction）」，③「配分的取引（rationing transaction）」，の 3 つに分類。これらの取引の複合体は，ゴーイング・コンサーンと呼ばれる全体を構成し，時間を通じた存続を求めていく。

・Commons は，制度にたいして，それの消極的概念が「集団」であるのたいし，積極的概念は「ゴーイング・コンサーン」であるとしている。

・Commons は, 取引を分析単位とする理由を, 人間のあいだの「利害のコンフリクト」,「相互依存的な利害状況」,「期待の安定性」（＝「コモンズの三重対（Commons Triple）」）を勘案できるためとしている。

（2）経済学における新制度主義：制度の効率性

① コース的精神：企業組織の生成と取引費用　（p.36）

・新制度派の創始者とされるシカゴ学派の Ronald Coase は，（旧）制度主義にたいして「非論理的であるばかりか, 理論をもたない観察事実の集積物である」と否定的評価を与え，新制度派経済学（New Institutional Economics: NIE）という呼び名を好んで用いている。

- 新旧の制度主義は，制度が重要な関係をもつという精神を共有しているとしても，制度の決定的要因を経済理論の分析道具の対象とするかどうかにかんして決定的差異が存在する。
- さらに新制度主義は，最適状態を説明しようとするものであり，累積的変化のプ

ロセスの説明を怠っているという意味で制度主義であると言えない。

・しかしCoaseは企業組織を説明するにあたって,パワーにフォーカスを当てることで,取引費用（transaction cost）という概念を導入。

② 取引費用経済学の特徴　（p.37）

・企業組織をパワーにもとづいた資源配分メカニズムとして捉え,取引費用節約の比較効率性によって諸制度の存在理由を解明するというコース的精神を結晶化し発展させたのが取引費用経済学（Transaction Cost Economics: TCE）である。

・その代表的理論家としてバークレー学派の Oliver Williamson が挙げられる。

・取引費用経済学の貢献として，第 1 に，取引を分析単位というコモンズ的精神を継承するとともに，個人モデルを基盤として取引費用の発生理由を明らかにした点。

- 限定合理性（bounded rationality)。
- 情報の偏在ないし非対称性。
- 機会主義。

・貢献の第 2 として，新古典派が想定する無数の経済主体による匿名的なスポット的取引の世界から,少数の経済主体間で継続的に行なわれる関係特殊的取引の世界への変化を描き出した点。

・理論的貢献として,取引費用の操作化を図るとともに経済組織の多様性の解明を志向している点。

③「企業の性質」と「企業の境界」　（p.39）

・取引費用経済学の命題は,「企業とは何か」から「市場と企業のあいだの境界がいかにして決定されるか」という問題意識に広がっていく。

- 不完備契約論。

・取引費用経済学は，人間の行動仮定として限定合理性を採用しているとは言うものの,経済主体が意識していなくともあたかも最適な解をしっているかのごとく行動することによって,所与の条件下においてファーストベストのガバナンス構造ないし制度均衡に到達するというストーリーを可能にする。

・結局，取引費用経済学は，パワーを基盤としたガバナンス構造という表面的な装飾を施した企業観を提示してはいるが,実質的には市場と効率性によって形作られた一意均衡の理論という色彩をもち，事実上，新古典派の迷宮から抜け出せない状態にあると言わざるをえない。